九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Gawain-poetの作品における中性人称代名詞Hitの用法

田島, 松二
九州大学教養部 : 助教授

https://doi.org/10.15017/6796150

出版情報：言語科学. 11/12, pp.23-36, 1976-03. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Gawain-poet の作品における中性人称代名詞 Hit の用法

田　島　松　二

0. はじめに

ME 人称代名詞の最も重要な変化は 3 人称に見られる。つまり，女性代名詞 she や複数代名詞 they, their, them が使用されるようになったことである。そのためか，これまでの ME 人称代名詞研究もこれらの点を扱った形態論的なものが多く，他には ye, thou という「呼び掛けの代名詞 (Pronouns of Address)」や,「君主の 'We' (Plural of Majesty)」を扱ったものなどが主なものである。中性人称代名詞 it については，わずかに ME 入門書や英語史などでその概観を得ることはできるが，それらとて当時の用法を詳らかにしているとは言えないようである。というのは，OE, ModE はおろか ME の同世代の作家にもあまり見られないような用法が，*Gawain*-poet の作品にはかなり見られるが，OED や MED などの断片的な言及を除けば殆んど注意すらされていないからである。そこで小論は，14世紀後半（恐らく "1360-95年") に North-West Midland 方言で書かれた，作者は不明であるが同一詩人の作と考えられる 4 つの作品——創作年代順(推定) に *Patience* (532行), *Purity* (or *Cleanness* 1,812行), *Pearl* (1,212行), *Sir Gawain and the Green Knight* (2,531行)——を中心に，同世代の Langland (*Piers Plowman*) その他にも言及しながら，it の用法を記述し，そうすることによって ME における it の用法をいささかでも明らかにしようとするものである。[1)]

以下，慣例に従ってこの不明の詩人を *Gawain*-poet と称し，上記作品については PAT =*Patience*, PUR=*Purity*, PRL=*Pearl*, GGK=*Sir Gawain and the Green Knight* という略称を用いる。

I. 語　形

名詞や形容詞に比較して，一般に人称代名詞は OE 以来の語形変化を最もよく保存している。参考までに 3 人称単数中性代名詞 it の, OE, Early ME, ME, ModE における代表的な形を示すと次のようになる。

	OE	Early ME		ME	ModE
Nom.	hit	hit, it		hit, it	it
Gen.	his	his		his	its
Dat.	him	him	Obj.	hit, it	it
Acc.	hit	hit, it			

1.1　ブルンナーによれば，主格と対格の *hit* はすでに12世紀以来強勢のない位置では初頭音 /h/ を失ない *it* となることが多く，h を書く綴り (*hit*) は16世紀まで続いたが h のない綴りが

15世紀以後増え，16世紀には一般化したという。[2] *Gawain*-poet と同世代の Chaucer や Langland などでは ***hit***, ***it*** の両形が用いられているが,[3] *Gawain*-poet には ***it*** という形は全く現われず，***hit***(455例)，***hyt***(８例)という形だけが無差別に用いられている。(以後 *Gawain*-poet の 'it' に言及する際は ***hit/hyt*** とせず，***hit*** を用いる。)

(1) GGK 1235 I schal ware my whyle, quyl ***hit*** lastez.
(2) PRL 283 Now haf I fonde ***hyt***, I schal ma feste.

属格に関していえば，すでに OE において男性と同形の属格 ***his*** はあまり用いられず，初期 ME の文法的「性」の消失以来,「生物」には ***his***,「無生物」には ***of it/thereof*** が用いられる傾向があった。OE, ME の中性属格 ***his*** は ModE では its となっているが，この変化は16世紀以後のことである。この中性単数属格については *Gawain*-poet は注目すべき形を用いているので，項を改めて論じることにしたい (§1.2参照)。

ME における人称代名詞のきわめて注目すべき変化の一つは，OE の与格・対格の区別が失なわれて目的格(Objective)に統一されたことである。３人称中性単数の場合も，対格が与格形を駆逐して目的格 ***hit*** に統一された。しかし，ME に４つの格を認める Mossé[4] や Mustanoja[5] などは，中性与格は常に ***him*** であるというような説明をし，更に後者は ***it*** を与格に使うことは稀で，この形は前置詞とともに使われると言っているが，いずれも事実に反することは以下に示す (3)～(6) の例を見ても明らかである。もっとも，次の例のように初期 ME では与格の ***him*** が散見されることはあるが，きわめて稀な現象と言えそうである。

Owl & N 681-2 Vor neuer nis wit so kene
So þane red ***him*** (=to it) is a wene.

Gawain-poet では Mossé や Mustanoja の言うような中性与格形 ***him*** は全く見られず，与格と対格を形態上区別することなく ***hit*** が用いられている。以下(3)～(5)は与格,(6)は対格の例である。

(3) PRL 269-70 a rose þat flowred and fayled as kynde ***hyt*** gef.
(4) PAT 85 I aproche ***hit*** no nerre.
(5) PUR 263-4 loke to kynde, And kepe to ***hit***.
(6) GGK 2359 My own wyf ***hit*** þe weued, I wot wel for soþe.

1.2 OE, ME における３人称中性単数属格は男性と同形の ***his*** で，これは初期 ModE になって作られた its (1800年頃までは it's と書いていた)[6] に取って代わられるまで使用された。[7] 一方，14世紀以降 ***his*** と相並んで無屈折の ***hit***, ***it*** も時折見られるようになったことは，しばしば英語史などの指摘するところである。[8] しかしながら，その最古の例に言及しているのは，Wardale[9] と Gordon[10] ぐらいで，前者は，すでに ***Peterborough Chronicle*** に起こると言うが，例を明示していないので真偽の程は明らかでない。後者の Gordon は，属格形 ***hit*** (=its) は *Gawain*-poet に初出し，今日でも Lancashire あたりの方言に残存していると言う。OED, MED, Mustanoja なども最古の用例を *Gawain*-poet に求めているが，それればかりか，引用されている ME 中の例は殆んどこの詩人のものばかりで，他はわずかに ***St. Erkenwald*** (c 1386), ***Awntyrs Arthur*** (c 1450), ***Towneley Plays*** (a 1460) からである。これからし

ても，この ***hit*** という属格形は Northern 及び North-West Midland 方言にのみ見られる形で，他の方言では ***his*** (=its) が唯一の形であったと推定される。実際，*Gawain*-poet では，明確な例だけでも PAT に2例，PUR に7例，PRL に3例見られ，更に複数属格の可能性をもった ***hit*** (=their) の例も PUR に1例見られるが，これら3作品には ***his*** の例は無いようである。これに対して，残るもう1つの作品 GGK には ***hit*** (=its) の例は皆無で，***his*** (=its) が規則的な形として現われる。これは注目すべき相違である。

(7) PAT 12 Sunderlupes for ***hit*** dissert vpon a ser wyse.
(8) PUR 1033 And as hit is corsed of kynde, and ***hit*** coostez als.
(9) PRL 108 Lorde, dere watȝ ***hit*** adubbement!
Other examples: PAT 267; PUR 264, 956, 1016, 1021, 1480, 1735; PRL 120, 224.

hit=their の可能性のある例：

(10) PUR 1391 Heȝe houses wythinne þe halle to ***hit*** med.

この 'to ***hit*** med' については異説があり，例えば Emerson[11] は 'med' を名詞と見なして ***to hit med***=in their middle or midst と解し，かつ þe の前にコンマが入るべきものと説く。とすると，***hit*** は先行名詞の 'houses' を指す属格である。一方，小論が Base Text としている PUR の編者 Menner[12] は MS. の 'med' を 'm[a]d' と校訂し，それを3人称複数過去の動詞と説明する。とすれば，***hit*** は目的格で先行名詞の 'palayce' (l. 1389) を指すと考えられる。どちらとも断定しがたいが，Emerson に従えば ***hit*** は複数名詞を受ける無屈折属格ということになる。(しかしながら，OED には med という語も，mid の異綴りとしての med も記載されていない。)

男性と同一形の ***his*** を避ける試みとして他にも種々の代用物が使われた結果，初期 ModE には his, it, thereof, of it の4つの形が見られるという。[13] ME 後期の *Gawain*-poet では ***of hit*** は起らないが，***perof*** が PUR に2例，PRL に5例，GGK に3例見られる。1例のみを示すと，

(11) PUR 604 In þe hyȝe hete ***perof*** Abraham bidez.

GGK では ***his*** (=its) が規則的な形であることはすでに述べたが，所有格を表現せず定冠詞を用いることも多々ある。次の例(12)はその両方を含んだ例である。

(12) GGK 446 hit lyfte vp ***þe*** yȝe-lyddes . . . And meled þus much with ***his*** (=its) muthe.

Gawain-poet の作品全体を通して見ても，名詞の属格がしばしば語尾なしに使われている (e.g. PUR 1697 kyte paune 'kite's nails') が，このことも無屈折の ***hit*** が属格として使われることに影響を及ぼしていると考えられる。

このように，14世紀以降 ***hit, it*** が中性単数属格として用いられたという事実が後に its の発達を促したであろうことは想像に難くない。[14] というのは，its という属格形は単数名詞の属格形の類推 (cat : cat's/stone : stone's/it : it's (18世紀まで)>its) によってできた形だからである。[15] その意味では，17世紀頃まで用いられはしたが ME でもきわめて稀な ***hit*** という無

屈折属格形を *Gawain*-poet が最初にしかも比較的頻繁に（PAT, PUR, PRL では規則的な形）用いているという事実は，it の歴史の中でも特記に値するように思われる。しかし，同じ作者の GGK には1例も起こらず，*his* が規則的な形であるという点も興味ある事実である。

II. 用　法

人称代名詞は中性の it（及びその複数形 they）を除き，殆んど常に限定的に用いられる。つまり，ある特定の人物あるいは事柄を指示する。ところが it は限定（Definite）と不定（Indefinite）両様に用いられる。この点が it を他の人称代名詞 he, she, etc. と区別する大きな特質である。そこで小論においても，限定用法と不定用法という伝統的分類に従って it の種々の用法を見てゆくことにする。

2.1 It の限定用法

既出の語句または話の内容を指し示す用法で，人称代名詞の用法に完全に一致する。これは OE 以来 ModE に至るまで変らぬ用法であるから，2,3例を挙げるにとどめる。

(13) PAT 425 Now, lorde, lach out my lyf, *hit* lastes to longe.
(14) GGK 839 *þ*er Kryst *hit* you for*ȝ*elde.
(15) PUR 956 *þ*e rayn . . . Swe about Sodamas and *hit* sydez all.

この限定（あるいは指示）用法で注目すべきことは，be 動詞の複数形をともなった it が先行する複数名詞を指し示し，事実上 they と同じ意味を持つ例が見られることである。この用法は ModE には起こらないが，古くは OE までさかのぼることができるもので，Quirk & Wrenn や Mitchell などによれば，OE においては中性単数代名詞 hit, þæt, þis, hwæt などはそれが指示する名詞の数（Number）や性（Gender）に関係なく用いられていたという。[16] 例えば，

(OE) *þǽt* wæron eall Finnas (=they were all Fins). [Mitchell]

ME でも決して稀な語法ではなく，Skeat は "This is the usual idiom."[17] と言い，Mossé は "This is a normal ME construction."[18] と言っている。実際，Langland や Chaucer などにも時折見られ，特に前者の *Piers Plowman* には数例現われる。(e.g. *PPl* A VII 46-7/B VI 56/C VI 59/C XVI 309)。*Gawain*-poet においても，明確な例だけでも PAT に2例（先行名詞を指す主語の hit 14例中），PUR に6例（41例中），PRL に1例（20例中）見られる。しかしながら，GGK では先行名詞を指す主語の hit 59例中そのような例は皆無であった。

(15) PUR 866-9 I haf . . . tow my fayre de*ȝ*ter, . . . *Hit* arn ronk, *hit* arn rype, and redy to manne.
(16) PAT 40 And als, in my vpynyoun, *hit* [i.e. pouerte and pacyence] arn of on kynde.
Other examples: PAT 38; PUR 112, 171, 253, 795; PRL 895.

一方，*hit* が明らかに先行する複数名詞を指し示しながら，be 動詞が単数形になっている例

も一つ見受けられる。

(17) PUR 257-8 For ***hit*** was þe forme-foster þat þe folde bred, *þ*e aþel aunceterez sunez þat Adam watz called (=For they were the first off-spring that the earth bred, sons of the noble ancestor who was called Adam).
Cf. PUR 253 ***Hit*** wern þe fayrest of forme and of face als.

上例 l. 257の ***hit*** は l. 253 の ***hit*** 同様 l. 251 の 'þe folk' を指し，かつ補語が複数であることを考えても，***hit*** が複数 (=they) の意味であることは間違いないであろう。

このように，主語としての ***hit*** が先行の複数名詞を受けることがある以上，目的語としての ***hit*** も当然先行の複数名詞を受けることができるはずである。が，この点に言及しているのはわずかに MED だけである。MED (s.v. hit 2. (f)) は1200年頃の ***Southern Legendary*** (***The Southern Passion***) からの例を最古として以下数例を引用しているが，*Gawain*-poet の用例には全く触れていない。文脈からその可能性のある例が少なくとも2例は見られる(PUR 1412, 1514)。そのうちの1例を，Langland からの明白な例とともに示そう。

(18) PUR 1514 Quen renkkes in þat ryche rok rennen ***hit*** [i.e. 1510 kowpes] to cache.
Cf. *PPl.* B VI 42-3 And thowgh pore men profre 3ow presentis and 3iftis, Nym *it* nau3te (=Don't take them).

また，所有格の ***hit*** が先行の複数名詞を受ける可能性のある例も PUR に1例見られるが，これはすでに §1.2 でやや詳しく論じたのでここでは例示せず，事実の指摘だけにとどめたい(例文(10)参照)。

以上はいずれも ***hit*** が既出の複数名詞を受けて 'they, their, them' の意味を持つものである。が，次に示すように，***hit*** が指し示す先行名詞を持たず，その意味では形式上は不定であるが，実際には関係代名詞の先行詞として用いられ，つまり後続の記述によって限定されて，***hit*** ... *þat*=they ... that=those who のように複数の意味を表わす場合が稀にある。*Gawain*-poet にも次の2例が見られる。

(19) PRL 1199 Lorde, mad ***hit*** arn þat agayn þe stryuen (=Lord, mad are they who struggle with thee).

(20) PAT 69 For iwysse ***hit*** arn so wyk þat in þat won dowelle3 (=For indeed, they are wicked who dwell in that city).

次例のように複数代名詞 *þay* や *þose* が起こることは言うまでもない。

(21) PAT 13-4 *Thay* are happen þat han in herte pouerte, For hores is þe heuen-ryche to holde for euer.

(22) PUR 261 And *þose* lykkest to þe lede þat lyved next after (=And those who lived next were most like that man).

また，***hit*** ... *þat*=that ... which=what の意味を表わす例も1つだけあった。この場合の ***hit*** は上例 (19) (20) と違って単数の意味を表わす。(なお，OED の初出例は1200年頃のものである。)

(23) GGK 1256-7 Bot I louue þat ilk lorde þat þe lyfte haldez, I haf *hit* holly in my honde *þat* al desyres (=I thank the lord who rules the heavens, I have what all desire utterly in my power).

2.2 It の不定用法

前項§2.1で扱った it はいずれも限定された意味を持ち，既出の事項を指し示す働きをするものであるが，同じく指示的に用いられるといっても，this や that と比べて指示するものに対する具体感がきわめて稀薄であり，[19] かつ「性」の消失後すべての名詞や先行文等の内容を指すようになったことから他の人称代名詞には見られない諸々の用法を発達させた。それらがこれから見てゆくことにする不定 (Indefinite) の 'it' で，言わば it の特殊用法とでも言うべきものである。不定の 'it' とは，意味上は全く無意味であるかもしくは漠然としたものを指しているが，文の文法的形式の上からは主語または目的語になっている it のことである。

2.2.1 形式主語 (Formal Subject) としての It

2.2.1.1 非人称の 'it' (Impersonal 'it')

非人称動詞または非人称構文の主語として起こる it を言う。

(a) 天候・時間・距離・明暗等自然現象に関する動詞とともに。これは今日でも非人称的に用いられる構文であるが，すでに OE で全く一般化していた。*Gawain*-poet からの例：

(24) PRL 538 þe sunne watȝ doun and *hit* wex late.

(25) GGK 1078 *Hit* is not two myle henne (=hence).

OED (s.v. It 3. c.) は距離に関する it の最古の例を 1593年 (Shaks. Rich II, II. iii. 1) としているが，上例 (2) はそれよりもはるかに古いものである。

(b) 情緒を表わす動詞：*þynk*, *seme*, *bitide*, *cheve* (=happen), *lyke*, *nede*, *falle* (=happen), *pay* (=please) などとともに。この種の動詞は元来行為者の表示なく用いられた。例えば，

(OE) him spēow (=they succeeded) [Brook]
ǣlcum menn þuhte (=(It) seemed to each man) [Quirk & Wrenn]

後期 OE になって，swā *hit* þincan mæġ (=as it may seem) [Quirk & Wrenn] のように形式主語 it を含む例も見られるようになり，ME に入って徐々に多くなる。しかし，ME においても me thynketh, me semeth, me wondreth, etc. のように依然として it を欠く非人称動詞として用いられたものもある。これらの動詞は ME 期に人称構文へ移行し，その際人的（与格）目的語が主語になった (e.g. I think, I like, etc.)。*Gawain*-poet においては，非人称動詞そのものが人称動詞へ移行してゆく過渡期的段階を示しており，人称動詞として用いられている例も多いが，非人称動詞として用いられているものに関して言えば，形式主語 *hit* を含む例と含まない例の両型が拮抗している。

(26) PRL 1165 *Hit* payed hym not þat I so flonc.
Cf. PRL 1177 *Me payed* full ille to be outfleme (=[It] greatly displeased me to be an exile).

(27) PUR 290-1 sore *hit* me rwez *þat* ever I made hem myself.

(28) GGK 2449 gayn ***hyt*** hym þoȝt (=it seemed wonderful to them).

(c) その他：次のような ***hit*** も非人称の 'it' と見なされる。[20]

(29) PAT 124 *Hit* may be þat.../GGK 2521 As ***hit*** is breued (=told) in þe best boke of romaunce/GGK 2171 as ***hit*** were/PRL 787 As in þe Apocalyppez ***hit*** is sene, etc.

2.2.1.2 予備の 'it' (Preparatory 'it')

後続の語句を代表して前に立って主語となる it のことで，後続の語句とは(代)名詞，不定詞，動名詞，***that***-clause および疑問詞・関係代名詞または whether によって導かれる名詞節である。この用法は ModE のそれと一致するので，注意すべき点だけを *Gawain*-poet に関して言えば，

(a) 後続の複数名詞を指すことがある (PUR にのみ2例)。

(30) PUR 1328 And ofte ***hit*** mekned his mynde, ***his maysterful werkkes.***

(31) PUR 1553 For al ***hit*** frayes my flesche, ***þe fyngres so grymme.***

なお，***hit*** が先行する複数名詞を指し示す例があることについてはすでに触れた通りである (§2.1の例文(15)(16)を参照)。

(b) 後続の不定詞を指す場合に Bare infinitive を指す例がある (PUR にのみ1例)。

(32) PUR 1359 *Hit* is not innogh to þe nice al noȝty þink ***use.***

脚韻・頭韻など韻律上の要求により，あるいは真主語を強調するために不定詞が ***hit*** に先行することが稀に起こる。(もっともこれは不定詞の場合に限らず，***that***-clause や疑問詞に導かれる名詞節の場合にも見られる。)

(33) GGK 257 To wone any quyle in þis won, ***hit*** watz not my ernde.

ところで，形式主語 it を用いた構文 'It is ... to do～' 型と it を用いない構文 'To do～ is ...' 型では，歴史的にも前者が古く，OED (s.v. To 13 a & b) によれば前者の初出例は890年頃のもので後者のそれは14世紀のものであるが，頻度の点からも前者の方が多い。*Gawain*-poet では前者が19例，後者が9例となっており，ModE と同じ傾向を示している。

(c) 動名詞を指す it の例は見られない。これは ModE に発達した用法である (e.g. *It* is no use ***crying over spilt milk.***)。

(d) that (=what) に導かれた名詞節を指す例がある (PRL に2例，GGK に2例)。

(34) PRL 482 ȝyf hyt be soth ***þat*** þou coneȝ saye.

2.2.1.3 予備の 'there' の同義語として

ModE なら予備の 'there' が用いられるところに ME では稀に ***hit*** が用いられる。つまり，***hit is***=there is, ***hit was***=there was, ***hit arn***=there are, ***hit weren***=there were, etc. となるのである。これはドイツ語の es ist (=there is), es sind (=there are) の用法に対応する。

OED (s.v. It 2. b.) の初出例は a 1300 ***Cursor Mundi*** からのものであるが，MED (s.v. hit 4b. (b)) はそれよりもはるかに古い例

a 1225 (? OE) *Lamb. Hom.* 139: Fiat lux & facta est lux, beo liht and ***hit*** wes liht. c 1250 *Owl & N.* 906: Wi nultu singe an oder þeode, þar ***hit*** is muchele more neode?

を引用しており，かつ MED は1500年までの例を示し，OED は a 1617年までの例を示している。Kellner も ME および16世紀まで用いられていると言う。[21] 従って，Mossé の「この用法は13世紀まで見られる」という説[22]は明らかに間違っている。

ME では *Havelok the Dane* (1270年頃)，*Cursor Mundi* (1300年) などに比較的よく見られ，他の作品 *The Owl and the Nightingale, Piers Plowman, Sir Orfeo* などにも散発的に起こるが，*Gawain*-poet では GGK にのみ2例見られるものの，PAT, PUR, PRL には1例も起こらない。

(35) GGK 280 *Hit* arn aboute on þis bench bot berdlez chylder (=There are none but beardless children on this bench round about).

(36) GGK 1251-2 Bot ***hit*** ar ladyes innoȝe þat leuer wer nowþe Haf þe, hende, in hor holde (=There are many ladies who would rather have you, dear sir, in their power now).
Cf. *Havelok* 591 Of hise mouth *it* stod a stem (=from his mouth there came a ray).

予備の 'there' と同じ機能をもった it が ME において 'regularly'[23]に，あるいは 'commonly'[24]に起こると説く者もあるが，***there*** 構文もすでに OE から用いられ，[25] ME ではほぼ確立しており，例えば *Gawain*-poet でも以下に示すような ***there*** 構文の方が圧倒的に多いことなどを考えると，これは言い過ぎであろう。

(37) GGK 2098 ***per*** wonez a wyȝe in þat waste (=There lives a man in that wasteland).

(38) PUR 1533 ***per*** apered a paume (=There appeared a hand).

(39) PRL 493 ***per*** is no date of hys godnesse.

it=there の用法は他の作品に現われる状況を考えても，それほど一般的なものとは言い難く，ME でもむしろ稀な用法と言えそうである。

2.2.1.4 環境の 'it' (Situation 'it')

漠然たる環境または不定の状況を表わすが，それが何であるかは文脈またはそのときの状況から判断できる it を言う。[26] この用法は ModE ではきわめて普通のものであるが，ME でもその例は多い。

(40) PRL 147 For if ***hit*** watȝ fayre þer I con fare (=it was lovely where I walked).

(41) GGK 1186-7 he . . . wayteȝ warly þiderwarde quat ***hit*** be myȝt. *Hit* watȝ þe ladi, loflyest to beholde (=he . . . glanced cautiously in that direction to see what it could be. It was the lady, most beautiful to beholde).

Gawain-poet では上例 (41) のように，前後関係からわかる人間を指す例が比較的多い（他に PUR 134, 981, 1777; GGK 5)。

2.2.1.5　強調構文 'It is . . . that—' の 'it'

名詞・代名詞（相当語句）および副詞（相当語句）を強調する形式で，この構文はすでに OE の時代からあったが，そこでは hit ではなくて指示詞 *þæt* (=that) が用いられた。

(OE) *A.S. Chron.* C 1052 *Ðæt* wæs on þone Mōnadæȝ æfter sca Marian mæsse þæt Godwine . . . becōm (=It was on Monday after Mary mass that Godwine . . . came) [OED]

指示詞 *þæt* に代わって指示力のない ***hit*** が起こるようになったのは初期 ME になってからである。OED (s.v. It 4. d.) によれば，その初出例は13世紀後半に書かれたと推定される *The Owl and the Nightingale* からである。

Owl & N 1165 Heruore ***hit*** is þat me þe shuneþ (=For this it is that one shuns you).

この例もそうであるが，強調構文に言及している OED (s.v. It 4. d.), Mustanoja,[27] Kellner,[28] などはどういうわけか副詞句を強調した例しか挙げていない。然るに，*Gawain*-poet にはこの強調構文が8例起こるが，主語を強調したもの5例，目的語1例，前置詞の目的語1例，副詞句1例となっており，ModE と何ら変らない用法を見せている。

(42) GGK 906 And ***hit*** watz Wawen hymself þat in þat won syttez.
(43) GGK 2358 For ***hit*** is my wede þat þou werez.
(44) PAT 146 ***Hit*** watȝ a ioyles gyn þat Jonas watȝ inne.
(45) PUR 1226-7 Nas ***hit*** not for Nabugo ne his noble nauþer, *þ*at oþer depryued watz of pryde with paynes stronge.
Other examples: PAT 115; PUR 1704; GGK 2107, 2193.

2.2.1.6　冗語の 'it' (Pleonastic 'it')

it に限らず構文上不必要と思われる人称代名詞が繰り返されることがよくある。いわゆる冗語法 (Pleonasm) である。このような冗語法が起こるのは，一つには曖昧さを避けたいという気持，また一つには強調の目的からであるが，韻文の場合はしばしばリズムつまり韻律を保つために行なわれる。初期 ModE まではしばしば見られる語法で，he, she, they などについては Kellner も OE 以来の例を示している。[29] it については，OED (s.v. It 5.) は1430年頃の例を最古としているが，これよりはるかに古いことは以下に示す例からも明らかである。*Gawain*-poet でも冗語の ***hit*** は散見されるが，それは次の3つの型で起こる。

（a）主語にあたる名詞の後（4例）:

(46) PRL 41 On huyle þer ***perle hit*** trendeled doun.
(47) PUR 967 ***þe brethe of þe brynston*** bi þat ***hit*** blende were (=By the time the breath of the brimstone would have ceased).
Other examples: PUR 858; GGK 504.

上例(46)では強調もしくは韻律を保つために，(27)では頭韻上の技巧により真主語と動詞の位置が離れすぎたために冗語の ***hit*** が繰り返されたと考えることができる。

（b） 関係節の後（2例）：

(48) PUR 141 *þe abyt* þat þou hatz vpon, no halyday *hit* menskez (=The clothing that thou hast on, [it] is not for a holiday).

(49) PUR 235 Bot *þat oþer wrake* þat wex, on wyȝez *hit* lyȝt.

いずれも主語を明確に示すために ***hit*** が用いられたものであろう。

（c） 関係節の中（2例）：

(50) PUR 926 *þer* is *a cite* herbisyde þat Segor *hit* hatte (=There is a city nearby that [it] is called Segor).

(51) PUR 447-8 On þe mounte of *Mararach* of Armene hilles, *þat* oþerwayez on Ebru *hit* hat þe Thanes.

上に挙げた(50)～(51)でもいずれも主語を明確に示すため，あるいは強調するために ***hit*** が繰り返されたものであろう。

2.2.2 形式目的語としての It

§2.2.1 で観察したような形式主語の場合ほど広範囲には用いられていない。わずかに予備の 'it'，環境の 'it'，冗語の 'it' が起こるぐらいである。

2.2.2.1 予備の 'it'

Gawain-poet では，それほど例は多くなく，後続の名詞(2例)，不定詞(2例)，*that*-clause (2例)，*how*-clause (1例) を代表して前に立ち動詞の目的語となっている。そのうちの1例 (GGK 348) のみ Vt+*hit*+Comp+To-inf 型構文である。[30]

(52) GGK 2390 I halde *hit* hardily hole *þe harme* þat I hade.

(53) GGK 975-6 he *hit* quyk askez *To be her seruaunt sothly.*

(54) GGK 348-50 For me þink *hit* not semly, . . . *to take hit to yourseluen.*

(55) PAT 530-1 For-þy penaunce and payne to-preue *hit* in syȝt *þat pacience is a nobel poynt*, . . .

Other examples: PRL 985-6(名詞); PUR 1941 (*that*-clause); PUR 1153 (*how*-clause).

前置詞の目的語になっている予備の ***hit*** の例 (e.g. I looked upon *it* as very awkward *that he changed the subject just then.* [Jespersen]) は *Gawain*-poet には全く起こらない。

2.2.2.2 環境の 'it'

この用法はすでに OE に現われ，ME でも散見されるが，Kellner[31] や MED (s.v. hit 8.) に引用されている例を見ても 'make' とともに起こることが多いようである。*Gawain*-poet にはこの用法が7例見られるが，そのうち3例は ***make*** とともに起こる。その他は ȝelde(=reward) 2例，hafe 1例などである。

(55) GGK 988 *þ*us wyth laȝande lotez þe lorde ***hit*** tayt makez (=So with laughing words the lord makes merry).

(56) GGK 2441 þe wyȝe ***hit*** yow ȝelde (=may the One reward you for it).
Other examples: PAT 47[32]; PRL 512, 522; GGK 2315, 2410.

上例ならびに他の作品に現われる例を見ても，形式目的語としての環境の 'it' は特定の動詞，例えば ***make(n)***, ***have(n)***, ***ȝelde***, etc. としか起こらないようである。

2.2.2.3 冗語の 'it'

冗語の 'it' は目的語の場合にも見られるが，*Gawain*-poet では 4 例しか起こらない。

(a) 目的語にあたる名詞の後 (1 例)：

(57) GGK 1249-50 *þ*e ***prys and þe prowes*** þat plesez al oþer, If I ***hit*** lakked oþer set at lyȝt, hit were littel dayntė.

これは頭韻を整え，曖昧さを避けるためのものであろう。

(b) 関係節の中 (3 例)：

(58) GGK 2195 *þ*is ***a chapel of meschaunce***, þat chekke ***hit*** bytyde! (=This is a chapel of doom, which ill luck bafall [it]!)
Other examples: GGK 28, 1274.

上例は ***þat . . . hit***=which とも解されるが，構文上不必要と思われる hit が起こるのはリズムを整えるためか，目的語を強調するためであろう。

2.3 再帰用法の It (Reflexive 'It')

再帰代名詞の itself はすでに10世紀末に起こるが，ME 中稀で[33] 単に目的格の it がそのまま再帰的に用いられることが少なくなかった。もっとも，普通の人称代名詞 (目的格) が再帰代名詞として用いられることは ME の一般的な傾向であるが，it は him, her などに比べると稀のようである。

Gawain-poet では，***hitself***, ***hytself***, ***hitselven*** という複合形もそれぞれ 1 例ずつ見られるが，***hit*** がそのまま再帰的に用いられた例も 1 つだけある。

(59) PUR 927 Here utter on a rounde hil hit hovez ***hit*** one (=Here out on a round hill it lifts itself, alone).

III. ま と め

以上，*Gawain*-poet の作品に見られる中性人称代名詞 ***hit/hyt*** の用法を記述してきたが，主要な点をまとめると次のようになろう。

(1) まず，*Gawain*-poet が用いた語形に関しては次のような屈折表になる。( ) 内は明確なものではないが可能性があることを示す。複数形については，より一般的な ***þay*** の屈折も併記する。

	Sg.	Pl.
Nom.	hit/hyt	þay, hit
Gen.	hit, his	her, hor, þayr, (hit)
Obj.	hit/hyt	hom, hem, him, hit

ME でもきわめて稀な無屈折属格 *hit* が *Gawain*-poet において初めて用いられ，しかも PAT, PUR, PRL では規則的な形（ただし GGK では *his*）であることは特別の注意に値する。これが後に its の発達を促したと考えられる。

（2） 用法に関しては

（a） 限定用法で注目されるのは，主格の *hit* が既述の複数名詞を指し示し，かつbe 動詞の複数形と呼応して，事実上 'they' と同義の例がしばしば見られることである。その場合，be 動詞の単数形と呼応するのは1例のみである。

同じく目的格の *hit* が既述の複数名詞を指す例も数例見られ，属格 *hit* が先行の複数名詞を指す可能性のある例も1例起こる。

また *hit* . . . *þat*＝they . . . that＝those who の例も稀に起こる。

重要なことは，このような特殊な用法がいずれも PAT, PUR, PRL のみに起こる現象で，残る GGK には全く起こらないことである。

（b） 不定用法では

形式主語として，非人称の *hit* がかなりふつうに用いられること，予備の *hit* が後続の複数名詞を指すことがあること（ただし PUR にのみ），予備の 'there' と同じ機能をもった *hit* が起こること（ただし GGK にのみ），環境の *hit* は人間を指す（it was+[人]）例がしばしば見られ，それが慣用的にすらなっていること，また韻律上の要求あるいは曖昧さを避けるために冗語の *hit* がよく起こること，それも特に関係節においてよく見られること，などが注目される。

形式目的語としての *hit* の用法で目立つのは，ME で頻繁になると言われる予備の *hit* が稀であること，環境の *hit* が特定の動詞（*make*, *ȝelde*, etc.）とともに慣用的に用いられること，冗語の *hit* が韻律上の要求や曖昧さを避けるために，特に関係節の中に起こること，などである。

（c） 再帰用法の *hit* は 'him', 'her' などのそれに比べるときわめて稀で，わずかに1例見られるだけである。

以上を英語的観点から見れば，ME 文献にもきわめて散発的にしか現われない用法，例えば，既述あるいは後続の複数名詞を指し示す *hit*（つまり *hit*＝they, *hit*＝them), 'they . . . that＝those who' を意味する *hit* . . . *þat* の *hit*, 予備の 'there' と同義の *hit* (*hit*＝there), 無屈折属格の *hit* (*hit*＝its, および異論はあるが *hit*＝their) などがすべて *Gawain*-poet に起こるということ，しかも無屈折属格 *hit* は最古の例であるということは，ME のみならず OE から ModE に至る it の歴史的変化（発達）の中でも大いに注目に値する事実と考えられる。

他方，*Gawain*-poet の4つの作品——*Patience, Purity, Pearl, Sir Gawain and the Green Knight*——の中で考えると，既述・後続の複数名詞を指す *hit*, 'those who' を意味する *hit* . . . *þat* の *hit*, 無屈折属格の *hit* は PAT, PUR, PRL にのみ見られ，GGK には

全く見られず，しかも時代的に最も後期の作と考えられる GGK では属格は一貫して古形の ***his*** (=its) が用いられており，予備の 'there' と同義の ***hit*** は逆に PAT, PUR, PRL には皆無で，GGK にのみ起こるという著しい相違が見られる。偶然性とか，作者の個人的な好みとか，頭韻・脚韻など韻律上の技巧とかに殆んど左右されることなく用いられる，***hit*** のような基本的な語，いわば機能語 (Function Word) が，同一人の作と考えられる 4 つの作品間で，その用法に大きな違いを示すということは，同一人作者説が定着した感があるとはいえ，なお異論の余地も残されている *Gawain*-group，つまり Cotton Nero A. x. 稿本の authorship 研究に何らかの手がかりを与え得るかもしれない。しかし，今回はこのような統語上の重大な相違があるという事実の指摘にとどめ，authorship との関係については稿を改めたい。

(小論は北海道大学英語英米文学研究会の例会（昭和50年3月17日）において口頭発表した草稿に加筆修正を施したものである。)

〔注〕

1) 小論で使用した *Gawain*-poet 関係のテキストは次の通りである。
Patience, ed. J. J. Anderson, Manchester (Manchester University Press), 1969.
Purity, ed. R. J. Menner, New Haven (Yale University Press), 1920.
Pearl, ed. E. V. Gordon, Oxford (Clarendon Press), 1963.
Sir Gawain and the Green Knight, ed. J. R. Tolkien and E. V. Gordon, 2nd ed., ed. N. Davis, Oxford (Clarendon Press), 1968.
2) ブルンナー，K.,『英語発達史』(松浪有他訳)，p. 483.
3) Brook, G. L. (*A History of the English Language*, pp. 126-7) によれば，Chaucer では *hit* の方が *it* よりもふつうである。
4) Mossé, F., *A Handbook of Middle English*, §65.
5) Mustanoja, T. F., *Middle English Syntax*, p. 130.
6) Baugh, A. C., *A History of the English Language*, §182(3).
7) 'its' の記録された最古の例は現在までのところ1596年で，それは Thomas Thomas の羅英 (Latin-English) *Dictionarium* に現われる。Cf. Moore, S. & A. H. Marckwardt, *Historical Outlines of English Sounds and Inflections*, §132; 安井稔「Its の年代」(『英語学研究』), pp. 133-5.
8) Baugh, A. C., *op. cit.*, §182(3); Brook, G. L., *op. cit.*, p.130; Mustanoja, *op. cit.*, p. 157; etc.
9) Wardale, E. E., *An Introduction to Middle English*, pp. 92-3.
10) Gordon, E. V., (ed.) *Pearl*, p. 110.
11) Emerson, O. F., "Middle English *Clanness*," *PMLA*, XXXIV, p. 513.
12) Menner, R. J., (ed.) *Purity*, p. 107 および Glossary, s.v. make.
13) Baugh, A. C., *op. cit.*, §182(3).
14) Cf. Moore & Marckwardt, *op. cit.*, §132.
15) 多分 *his* の類推によって作られたという説もある。Cf. Bloomfield, M. W. & L. Newmark, *A Linguistic Introduction to the History of English*, p. 295.
16) Quirk & Wrenn, *An Old English Grammar* (Second Edition), §125; Mitchell, B., *A Guide to Old English*, §187. 2(c).
17) Skeat's *Piers the Plowman*, Vol. II, p. 63.

18) Mossé, *op. cit.*, p. 394.
19) 江川泰一郎『代名詞』(英文法シリーズ4), p. 41.
20) 江川, 同上, pp. 24-5; ブルンナー, 『英語発達史』, pp. 493-4; Mustanoja, *op. cit.*, p. 131.
21) Kellner, L., *Historical Outlines of English Syntax*, §281.
22) Mossé, *op. cit.*, §174.
23) Dickins, B. & R. M. Wilson, "Note to Havelok 27" in *Early Middle English Texts*, p. 176.
24) Sisam, K., "Note to Sir Orfeo 552" in *Fourteenth Century Verse and Prose*, p. 221.
25) OED (s.v. There 4. a. & d.) では, 自動詞とともに用いられた予備の 'there' の初出例が c 888年で, be 動詞とともに用いられた例が c 893年となっている。
26) 江川『代名詞』, p. 39.
27) Mustanoja, *op. cit.*, pp. 131-2.
28) Kellner, *op. cit.*, §282.
29) *Ibid.*, §§284-7.
30) ブルンナー(『英語発達史』, p. 496) は, この型は後期中英語および初期近代英語に発達したものであると説明し, その初出例を *Mandeville Travels* (1400年頃)に求めている。一方, 中尾俊夫氏(『英語史II』, p. 186)は, 「EME 以来あらわれ, LME になると徐々に頻度を増した」と述べているが, 例文は挙げていない。手許の GGK 348-50の例はブルンナーの例よりも古く, 最も早い用例の1つであろう。
31) Kellner, *op. cit.*, §283.
32) Anderson はこの *hit* を 'Impersonal object' と注記している (*Patience*, Glossary s.v. hit)。
33) 中尾俊夫『英語史II』, p. 188.

(1975年7月10日脱稿)